

令和四年度 一般選抜入学試験（後期）

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は表紙を含めないで3ページあります。解答用紙は3枚です。下書き用紙は1枚あります。
試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 3 試験開始の合図があったら、まず、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入してください。
- 4 解答はすべて解答用紙のそれぞれの解答欄に記入してください。
- 5 試験時間は90分です。
- 6 解答用紙は記入の有無にかかわらず、持ち帰ってはいけません。
- 7 この問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読み、問いに答えなさい。

知育中心そして親に万事庇護された生活も、日本の子どもたちの自信の低さの背景です。「できるだけのことをしてやる」親の愛情」との考えから、大学生になっても、親の世話のもとに生活を送る青年たち。それは恵まれているかにみえますが、おとなになることを遅らせています。

おとなになるのを遅らせている一因は、自立した生活体験の欠如にあります。日本の若者は日常生活での諸事も親任せにしている傾向があります。日本の子どもは家事手伝いは、世界の他国と比べても相当に下のレベルです。

子どもに対して、学校をはじめ教育機関ではできない、家庭や親でなければできないことがあります。家庭のメンバーとして親と子どもが体験を共有すること、家族のために必要な労働に参加することです。これらは、自分のため(だけ)ではなく、人のために自分の力と時間を使うことであり、自分が他者の役に立ったことを実感させる機会を与えます。

一九三〇年代初頭の大恐慌のとき、それまで恵まれた生活を送っていたアメリカの中上流階層の子どもたちは、親の失業や家業の倒産によって生活が激変しました。父親の収入は激減し、それまで子どもに手厚い世話をしてきた母親も働きに出たり、子どもも新聞やミルクの配達で稼いだお金を家計にいれたり、母親に代わって家事や小さい子の面倒をみたりするなど、それまでの親の庇護の下に勉強と遊びに明け暮れる生活とは一変したのです。

このような過酷な体験をした子どもたちが、どのように成長したかを追跡した古典的な研究があります。その結果を要約すれば、ごく幼少の子どもを除けば、貧困の中での子どもたちの体験は、のちのちまでプラスの意味をもっているというものでした。自分のわずかな稼ぎが家計に役立ったと感謝されたり、自分の作ったつたない料理に仕事から疲れて帰った親たちが喜んでくれたり、幼い弟妹に頼りにされたりなど、いずれも自分のしたことが他の人の役に立った体験です。この体験が、子どもに自分の力に自信をもち、自分は誰かのために必要な存在だという自尊の感情を抱かせました。当時を振り返って「辛い体験だったけれど、それがいまの自分をつくった」と肯定的に述懐しています。

経済的に生まれ、親の温かい世話を受ける生活は、通常「恵まれた」環境といわれます。けれども、そうとはいえないことをこの研究は示唆しています。温かく庇護され、保護された「恵まれた」生活では、子どもに、自分は守られている非力な弱い存在だとの思いを抱かせます。それが、子どもなりに精一杯働き、自力で立ったことが他の役に立つことを知ったとき、子どもは非力な弱者だという自己認識を修正するでしょう。自分には能力もあり、他者のために有用な存在だ

と実感がもてるのです。

いま紹介した研究は、子どもの発達にとって恵まれた環境とは何かという問題に一石を投じました。親から庇護される経済的に恵まれた環境が、子どもの発達にとって望ましいことなのかという問題です。研究は、逆境に育つことの積極的な意味を明らかにしたといえるでしょう。もう一つ重要なことは、次のようなことが明らかにになったことです。子どもには自ら遭遇した過酷な状況に、精一杯立ち向かうたくましい力があり、それを発揮することが自らを育てることにもつながるといふことです。

日本では、親が子に「してやる」ことが親の愛情とされています。しかし、子どもに自分でさせる機会を提供する、換言すれば、親はしてやらないことも重要な親の役割です。子どもが試行錯誤しながら自力で取り組もうとすることは、親の眼には効率が悪く見えるでしょう。しかし、上手に教えてもらったからできると思うのと、自分であれこれ工夫し試行錯誤を重ねて「できた！」となるのでは、子どもがもつ自己認識はまったく異なります。後者によって、自分の力への信頼や達成することへの強い動機が生まれます。

それ以上に重要なのは、子どもなりに自分の力で他者のために働く体験は、勉強という自分のための達成にはない意味をもっていることです。自分が他者のために役立つ、その力をもっているという自分への信頼感と有能感、その後の生き方を貫く強い根底となります。

親が「できるだけのことを子にしてやる」ような生活は、子どもにとっては何でも「してもらおう生活」にほかなりません。家事の手伝いはせず、勉強さえしていれば「よい子」とされる子どもたち、あるいは、アルバイトをするのはレジャー費を稼ぐなど、自分の娯楽のためという日本の一般的な学生の生活は、けっして「豊かな」発達環境ではありません。

「できるだけのことをしてやる」のを親の愛情、あるいは親のしてやるべきことと考えることは問題です。「してやらないこと」、子どもに自分でさせることは極めて大事なことです。

(柏木恵子『子どもが育つ条件 — 家族心理学から考える』による)

※文中の見出しは省略しています。一部の漢字にはルビを振っています。

問一 本文を二〇〇字以内で要約しなさい。

問二 二重線部について、作者はなぜ問題と考えるのでしょうか。三〇〇字以内で説明しなさい。

問三 波線部について、作者はどのようにすれば「有用な存在だと実感がもてる」と述べていますか。自分の体験や具体例をあげながら、四〇〇字以内で説明しなさい。